

詩篇 80 篇

0 指揮者のために。「さとしは、ゆりの花」の調べに合わせて。アサフの賛歌

《イスラエルの苦難》

- 1 イスラエルの牧者よ。聞いてください。ヨセフを羊の群れのように導かれる方よ。光を放ってください。ケルビムの上の御座に着いておられる方よ。
- 2 エフライムとベニヤミンとマナセの前で、御力を呼びさまし、私たちを救うために来てください。
- 3 神よ。私たちをもとに戻し、御顔を照り輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます。
- 4 万軍の神、【主】よ。いつまで、あなたの民の祈りに怒りを燃やしておられるのでしょうか。
- 5 あなたは彼らに涙のパンを食べさせ、あふれる涙を飲ませられました。
- 6 あなたは、私たちを隣人らの争いの的とし、私たちの敵は敵で、私たちをあざけっています。
- 7 万軍の神よ。私たちをもとに戻し、御顔を照り輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます。

《贖われたぶどうの木》

- 8 あなたは、エジプトから、ぶどうの木を携え出し、国々を追い出して、それを植えられました。
- 9 あなたがそのために、地を切り開かれたので、ぶどうの木は深く根を張り、地にはびこりました。
- 10 山々もその影におおわれ、神の杉の木もその大枝におおわれました。
- 11 ぶどうの木はその枝を海にまで、若枝をあのかくにまで伸ばしました。
- 12 なぜ、あなたは、石垣を破り、道を行くすべての者に、その実を摘み取らせなされるのですか。
- 13 林のいのししはこれを食い荒らし、野に群がるものも、これを食べます。
- 14 万軍の神よ。どうか、帰って来ててください。天から目を注ぎ、よく見てください。そして、このぶどうの木を育ててください。
- 15 また、あなたの右の手が植えた苗と、ご自分のために強くされた枝とを。
- 16 それは火で焼かれ、切り倒されました。彼らは、御顔のとがめによって、滅びるのです。

《同じ救いを》

- 17 あなたの右の手の人の上に、御手が、ご自分のため強くされた人の子の上に、御手がありますように。
- 18 そうすれば、私たちはあなたを裏切りません。私たちを生かしてください。私たちは御名を呼び求めます。
- 19 万軍の神、【主】よ。私たちをもとに戻し、御顔を照り輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます。

詩篇 80 篇のタイトルには「**さとしは、ゆりの花**」という言葉が添えられています。ゆりの花は「純潔」を表すと言われるところから、「純潔なさとし」というイメージを読み取ることがきるでしょう。全体として語られている内容は、イスラエルが直面していた苦難からの救いを求める祈りです。

本篇にはいくつかの目立った特徴がありますので、それに沿って話を進めてまいります。

特徴①：北イスラエ尔的地名

特徴②：ぶどうの木の直喩

特徴③：様々な角度からの神への呼びかけ

特徴④：3回出てくるフレーズ

特徴①：北イスラエ尔的地名

1 節と 2 節に「ヨセフ」「エフライム」「ベニヤミン」「マナセ」という北イスラエル王国に属する部族名が出てきます。正確に言えば、「ヨセフ」は部族名ではなく、彼の二人の息子「マナセ」と「エフライム」が祖父ヤコブの養子とされ、ヨセフの家系の流れの中で二つの部族を形成していきました。本来マナセが兄でしたが、ヤコブは意図的に弟エフライムを上に出ました（創世 48 章）。両者は強大になり、カナンの地の中央部を支配するようになりましたが、エフライムはイスラエルの代名詞となるほどの力を持つに至ります（ホセア書参照）。ソロモンの後の時代、イスラエルは南北に分裂し、北イスラエルはベニヤミンとユダ以外の十部族によって形成されていました。しかし、ここでベニヤミンの名前が出てくるのは、時々ベニヤミンが北王国側に含まれることがあったからでしょう。

この詩篇はおそらく、前 734～前 722 にアッシリアによって北イスラエル王国が滅ぼされた時のことを描いていると思われます。単純に読むと北イスラエルの誰かがこの嘆きの詩を詠んだと考えたくなるのですが、タイトルに出てくる「**アサフ**」という人物はエルサレム神殿に仕える者であるため、南王国側の人間だという可能性が高い。よって、この詩篇は南ユダ王国から北イスラエル王国の苦難を見て詠まれたものと考えられるでしょう。元々一つの民族であった十部族が一掃されてアッシリア帝国の属州にされてしまったことへの衝撃と哀しみが込められています。両王国の間には争いが尽きませんでした。政治的に接近した時期もあり、とりわけヒゼキヤ王の時代には北部族の生き残りの者たちをエルサレムでの過越の祭に招く取り組みがなされています（Ⅱ歴代 30 章）。

特徴②：ぶどうの木の直喩

8～16 節には「**ぶどうの木**」という表現が繰り返し出てきます。これは「イスラエル」を詩的に表す言葉で、旧新約聖書にたびたび登場します（イザヤ 5:1-7、エレミヤ 2:21、エゼキエル 15:ホセア 10:1、エゼキエル 15:2,6／ヨハネ 15 章も参照）。「**あなたは、エジプトか**

ら、ぶどうの木を携え出し、国々を追い出して、それを植えられました」(8節)とは、エジプトの奴隷生活から民を贖い、カナンの地に定住させてくださった主の御業を語っています。そして、神の民はその地で豊かに繁栄していきました(9～11節)。ところが、神が見出し、植え、育て始めておられたこの民は、敵による激しい蹂躪によって打ち破られ、民族としての崩壊の危機に直面していました。「道を行くすべての者」(12節)、「林のいのしし」「野に群がるもの」(13節)という表現は、彼らを食い尽くすアッシリア軍を指しているでしょう。完膚なきまでに叩きのめされた北イスラエルの姿を見て悲しむ南ユダの民の純粋な思い(ゆりの花)がこの詩には込められています。

特徴③：様々な角度からの神への呼びかけ

節は前後しますが、本篇では神への呼びかけが様々な表現でなされています。「イスラエルの牧者」「ヨセフを羊の群れのように導かれる方」「ケルビムの上の御座に着いておられる方」(1節)、「神よ」「万軍の神、主よ」(4節、19節)、「万軍の神よ」(7節、14節)。冒頭では神が「牧者」と呼ばれており、無力な羊の群であるイスラエルをやさしく導いていかれた配慮と思いやりが描かれています。「ケルビム」(1節)とは、神殿の中に安置された契約の箱の上に飾られた御使いの飾りであり、これは神の現臨を表していました。「わたしはそこであなたと会見し、その『贖いのふた』の上から、すなわちあかしの箱の上の二つのケルビムの間から、イスラエル人について、あなたに命じることをことごとくあなたに語ろう」(出25:22)。

神の呼び名は「牧者」から「万軍の神」へと移行していきます。「導く方」から「戦う方」への期待と祈りが込められているのでしょう。敵の前になす術をなくした羊の群を贖う方として、かつてエジプトに対してなされたようにアッシリアとも戦ってくださるよう求めているのです。

特徴④：3回出てくるフレーズ

3節、7節、19節の中に「私たちをもとに戻し、御顔を照り輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます」という全く同じフレーズが出てきます。「もとに戻す」とは、捕囚として連れ去られた民が祖国に帰ってくることを詩的に表しているでしょう。それと同時に、イスラエルが繰り返し偶像礼拝に陥って主なる神様を裏切ってきた歴史を悔い改め、彼ら自身が神の許に立ち返ることをも示しているでしょう。14節にも「帰って来てください」とありますが、原文で使われている「シューブ」という言葉は「悔い改める」ことを意味します。これは、神が向きを変えてくださることを願っていると同時に、民も神に向けて心の向きを変えることによって、再び両者が一つにされることを表しているでしょう。とはいえ、人が悔い改めることも自分の力ではできず、神の恵みによるものなのです。神が聖霊によって人の「石の心」を取り去ってくださらなくてはなりません。

本篇からの適用として、私たちの人生に訪れる苦難の日々にあって、神がなぜそのような状況を与えておられるのかを理解するための柔軟な心を与えてくださるよう祈りたいと思います。それは必ずしもイスラエルと同じ「罪の結果」と言えるものではないかもしれませんが、しかし、神ご自身の純粋な愛と目的の下に、私たちのすべての経験があるということをお忘れないうでいたいと思います。